弥生時代～古墳時代初頭の卜骨

－その系譜と消長をめぐって－

國分　篤志

原始・古代の日本列島で実修された占いとして、『古事記』・『日本書紀』などにみえる「太占」（ふとまに）がある。これは、例えば『古事記』神代巻天岩屋戸条において、「天の香山の眞男鹿の肩を内抜きに抜きて、天の香山の天の朱桜を取りて、占合いまかなはしめて…」[1] とあるように、シカなどの肩胛骨を素材に、火箸状のもので焦げ目を付け（焼灼）、その罅を観て占うものであり、占いに用いた痕跡の残る獣骨が「卜骨」である。

卜骨は、弥生時代から平安時代前期に至るまで、手法・形態・素材を変えつつも考古遺物として存在を確認できる。その消長を大局的にみると、帰属時期は弥生時代前期～古墳時代初頭と、古墳時代後期～奈良・平安時代の２つの時期に大別でき、中間に当たる古墳時代前～中期に帰属する事例は僅少である。

本稿ではこのうち、より資料点数が多く分布範囲も広い前者の時期を中心に、型式学的な見地から扱うこととする。弥生時代～古墳時代初頭の卜骨は、全国で 20 都府県 54 遺跡での出土が報告されている（第１図・第１表）。当該期における時期差・地域差などを明らかにしたい。なお、引用した卜骨の実測図のうち、肩胛骨を素材としたものでは、関節窩が下になるように配置させていただいていることをお断りしておく。

1. 卜骨の研究史

本論を進めるに先立ち、卜骨の研究史を、型式学的な見地からのものを中心に回顧しておく。

卜占の研究の端緒は、江戸時代の国学者である伴信友の著作「正卜考」（伴 1844）に遡る。伴は対馬に伝わる亀卜の秘伝書『対馬国卜部亀卜次第』を底本に古文献を博捜し、古代の卜占の具体的な所作などの復原を目指すとともに、「太占」の語が本来は鹿卜を指し、亀卜に先行する、など傾聴すべき指摘をおこなっている。そして、夕占・石占といった古代に存在した他の占いを「雑占」とするのに対し、「太占」を「神事の宗源」と位置づけている。

明治時代以降は卜占の起源などが研究の対象であったが、実資料がないため概して低調な研究状況であった。昭和 24（1949）年に考古資料としての卜骨が神奈川・間口洞穴で出土して以来、資料数は着実に増加しており、太占の実態を示す遺物として概説書でも取り上げられることとなる。

卜骨研究の嚆矢は、神澤勇一氏の研究（神澤 1976）である。氏は卜骨・卜甲の事例を集成し、素材や出土状況に注目するとともに、卜骨の形態を下記の５つに分類した。この分類が現在まで論文・報告書に引用されている。氏はその後も、現代まで残る神事や民俗例と考古資料を比較するなど、卜骨研究を続けている（神澤 1983・1987・1990）。

第Ⅰ形式：整形を全く施さず、肩胛骨中最も薄い棘下窩の片面を点状に焼灼したもの。古墳時代の一例のみ。

第１図　卜骨出土遺跡　分布地図

第Ⅱ形式：骨面を一部分鋭利な刃物で僅かに削り、その部分を点状に焼灼したもの。弥生時代の卜骨に限られる。

第Ⅲ形式：骨を大きく削ったところに、不整円形の粗雑な鑽を掘り、鑽内に焼灼を加えたもの。古墳時代前期に認められる。

第Ⅳ形式：骨面の一方に平面が正円形、断面が半円形を呈する整美な鑽を設け、そこに焼灼を加えたもの。古墳時代中期に認められる。

第Ⅴ形式：獣骨・亀甲を切削して整形したのち片面に長方形を呈する鑽を彫りこみ、鑽の底に十字形の焼灼を加えたもの。他面では入念な研磨。古墳時代後期から奈良時代・平安時代初頭まで継続する。

このうち、第Ⅱ形式が卜占面と焼灼面の一致するもの、その他が分離するものであり、第Ⅱ形式→第Ⅰ・Ⅲ形式→第Ⅳ形式→第Ⅴ形式という変遷案を提示した[2)]。

新田栄治氏は、世界各地での亀甲・獣骨を用いた卜占について、民族例および出土事例を調査し、焼灼の方法から、無灼法・有灼法・点状有灼法に分類した（新田 1977）。日本列島を含め東アジアは点状有灼法の分布範囲である。列島の卜占風習の起源を同時期の東アジアに求めると、中国本土とは直接的な関係は見出しにくく、寧ろ遼東半島や朝鮮半島などに親縁性を認められるとした。

遺跡No.	遺跡名	所在地		時期	焼灼パターン	ケズリパターン
		現在の行政区画	旧国名			
1	カラカミ	長崎県壱岐市	壱岐	弥生中期	Ⅱａ	A
2	原の辻	長崎県壱岐市	壱岐	弥生中期	Ⅱａ・ｂ	A・B・C
3	牟田寄	佐賀県佐賀市	肥前	弥生後期	Ⅱａ・Ⅱｂ	A
				弥生末～古墳初頭	Ⅰａ・Ⅲａ	D
4	西蒲池池淵	福岡県柳川市	筑後	弥生末～古墳初頭		
5	宮前川	愛媛県松山市	伊予	弥生末～古墳初頭	Ⅱａ・Ⅲａ	C・D
6	阿方	愛媛県今治市	伊予	弥生前期	Ⅱａ	A
7	上東	岡山県倉敷市	備中	古墳初頭	Ⅰｂ・Ⅲａ・Ⅲｂ	A・D
8	南方	岡山県岡山市	備前	弥生		
9	足守川加茂A	岡山県岡山市	備前	弥生末～古墳初頭	Ⅲａ	D
10	足守川加茂B	岡山県岡山市	備前	弥生後期前・中葉	Ⅰｂ・Ⅱａ・Ⅱｂ	A・B・C
11	津島江道	岡山県岡山市	備前	弥生後期	Ⅰｂ	A
12	古浦	島根県松江市	出雲	弥生前期	Ⅲｂ	D
13	青谷上寺地	鳥取県鳥取市	因幡	弥生前期	Ⅰａ・Ⅱａ	A・B・C
				弥生中期	Ⅰａ・Ⅱａ	A・B・C
				弥生後期前・中葉	Ⅱａ・Ⅲａ	A・B・C・D
				弥生末～古墳初頭	Ⅱａ・Ⅲａ	A・B・C・D
14	新方	兵庫県神戸市	摂津	弥生後期		C
15	森之宮	大阪府大阪市	摂津	弥生中期中葉	Ⅰａ	A
16	雁屋	大阪府四條畷市	河内	弥生中期		
17	鬼虎川	大阪府東大阪市	河内	弥生中期	Ⅱａ	A
18	亀井	大阪府八尾市	河内	弥生中期中葉	Ⅰａ・Ⅱａ	A
19	唐古・鍵	奈良県磯城郡田原本町	大和	弥生前期中葉	Ⅰａ・Ⅰｃ	A
				弥生中期	Ⅰａ・Ⅱａ	A
				弥生後期前葉	Ⅱｂ・Ⅲａ	C・D
20	四分	奈良県橿原市	大和	弥生中期	Ⅱａ	A
21	坪井・大福	奈良県橿原市	大和	弥生中期中葉	Ⅰａ	A
22	白浜貝塚	三重県鳥羽市	志摩	弥生中期	Ⅰａ	A
23	朝日	愛知県清須市	尾張	弥生中期中葉	Ⅰａ	A
				弥生中期後葉	Ⅱａ	A
24	神明社貝塚	愛知県知多郡南知多町	尾張	不詳	Ⅰａ	A
25	白岩	静岡県小笠郡菊川町	駿河	弥生後期	Ⅰｂか	
26	登呂	静岡県静岡市	駿河	弥生後期中葉	Ⅰｂ	A
27	石川	静岡県静岡市	駿河	弥生後期中葉	Ⅰａ	A
28	長崎	静岡県静岡市	駿河	弥生後期中葉	Ⅰｂ	A
29	瀬名川	静岡県静岡市	駿河	弥生末～古墳初頭	－	D
30	八反畑前田	静岡県三島市	伊豆	弥生後期	Ⅱａ	A
31	千代南原	神奈川県小田原市	相模	弥生末～古墳初頭	Ⅰｃ	A
32	河原口坊中	神奈川県海老名市	相模	弥生		
33	池子No.1-A地点	神奈川県逗子市	相模	弥生時代中期	Ⅱａ	A
	池子No.1-A東地点			古墳初頭	Ⅰｃ・Ⅲａ	A・D
	池子No.4地点			古墳初頭	Ⅰａ・Ⅰｃ	A
34	海外洞穴	神奈川県三浦市	相模	弥生後期	Ⅰｂ・Ⅰｃ	A
35	間口洞穴	神奈川県三浦市	相模	弥生中期	Ⅰａ	A
				弥生後期	Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅰｃ	A
36	毘沙門C洞穴	神奈川県三浦市	相模	弥生後期	Ⅰａ	A
37	毘沙門B洞穴	神奈川県三浦市	相模	弥生後期	Ⅰａ・Ⅰｃ	A
38	大浦山洞穴	神奈川県三浦市	相模	弥生中期	Ⅰａ・Ⅰｃ	A
				弥生後期	Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅰｃ	A
39	雨崎洞穴	神奈川県三浦市	相模	弥生後期	Ⅰｂ	A
40	鉞切遺跡	神奈川県横須賀市	相模	弥生末～古墳初頭	Ⅲａ	D
41	杉田東漸寺貝塚	神奈川県横浜市	武蔵	弥生末～古墳初頭	Ⅰｃ	A
42	向ケ岡貝塚	東京都文京区	武蔵	弥生後期中葉	Ⅰｃ	A
43	城の腰	千葉県千葉市	下総	弥生中期後葉	Ⅰａ	A
44	菊間	千葉市市原市	上総	弥生中期中葉	Ⅰａ	A
45	草刈	千葉県市原市	上総	弥生後期中葉	Ⅰｂ・Ⅰｃ	A
46	本寿寺洞穴	千葉県勝浦市	安房	弥生	Ⅰｃ	A
47	こうもり穴洞穴	千葉県勝浦市	安房	弥生末～古墳初頭	Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅰｃ・Ⅱａ・Ⅲａ	A・B・C・D
48	新保田中村前	群馬県高崎市	上野	弥生末～古墳初頭	Ⅱａ	B・C
49	生仁	長野県千曲市	信濃	弥生後期中葉	Ⅰｂ・Ⅱａ	A・B
50	四ツ屋	長野県長野市	信濃	弥生後期中葉	Ⅱａ？	
51	石川条里	長野県長野市	信濃	弥生後期中葉	Ⅰｂ・Ⅰｃ	A
52	畝田	石川県金沢市	加賀	弥生末～古墳初頭	Ⅲａ	D
53	浜端洞穴	新潟県佐渡市	佐渡	弥生末～古墳初頭	Ⅱｂ・Ⅲａ	A・D
54	千種	新潟県佐渡市	佐渡	弥生末～古墳初頭	Ⅲａ	D

第１表　卜骨出土遺跡一覧表

神澤氏の分類によれば、弥生時代の卜骨は全て第Ⅱ形式に分類されることとなる。これに対し、壱岐島のカラカミ・原の辻遺跡の出土資料を分析した木村幾多郎氏は、卜占面と焼灼面の分離したもの、骨面への明瞭な加工（整治）のあるものの存在から、弥生時代の卜骨が１つの分類では整理し得ない点を指摘する（木村 1979）。

その後は、地域毎の事例研究が中心となる。このうち特筆すべきものとして、北浦弘人氏は、鳥取県青谷上寺地遺跡の資料を整理する中で、「焼灼」「ケズリ」「ミガキ」「鑽」の４つの属性に分類し、その組み合わせによる型式の提唱を設定した。消長としては、Ⅰ期（弥生中期中葉）がケズリ A・焼灼 1、Ⅱ期（弥生中期後葉）がケズリ A または B・焼灼 2、Ⅲ期（弥生中期中葉～古墳前期初頭）がケズリ D・焼灼 4 が主体であるとした。（北浦 2002・2008、鳥取県教育文化財団 2001・2002）。波形早季子氏はこの分類を援用するとともに、素材となる動物の種類・部位にも注目して、全国の弥生時代の卜骨の変遷を追究している。西日本と東日本では、シカとイノシシの利用形態が大きく異なるという（波形 2009・2010）。

従前の研究史を顧みて、以下の点を問題点として指摘しておきたい。

1. 弥生時代の卜骨としての分類は精緻なレベルに到達していようが、古墳時代以降の卜骨との系譜関係が不明瞭である。
2. 多くの分類案が肩胛骨を中心にしているため、肩胛骨以外の素材への適用が難しい。

2. 分類基準

「卜占」の「卜」の字義は、焼灼により骨が「ぽくっと急に割れる」ことによるという（落合 2006）。骨を焼いて占う「骨卜」は、『魏書』東夷伝倭人条に「其の俗挙事往来に、云為する所有れば、輒ち骨を灼きて卜し、もって吉凶を占い、先ず卜する所を告ぐ。其の辞は令亀の法の如く、火坼を視て凶を占う」[3] とあるように、焼け罅（火坼）を観て占いの判断を下すものである。占いの痕跡を残す考古資料である卜骨を型式分類するとすれば、第一義には占いの判断方法、即ち焼灼の方法によらなければならない。そのため、先ずは素材の種類や焼灼の位置など、罅の入り方の異同に直結する要素を取り上げる。次に、北浦氏が分類されたような、焼灼前のケズリなどの加工も、副次的な要素として注目していくという手順を採る。

1. 素材

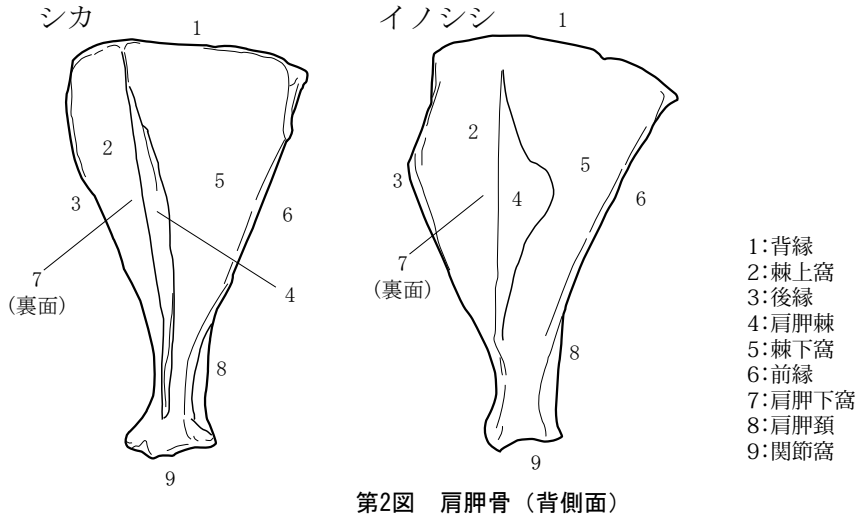
卜占の方法に規制を与える要素として、卜骨に利用される素材について簡単に触れておく。

獣種は基本的にシカとイノシシである。両者とも縄文時代以来の狩猟獣である。シカは銅鐸や弥生土器での絵画に画題となることが多く、各地の風土記での地名伝承説話でも取り上げられることから、神聖視された結果と評価されることが少なくない（平林 2012 ほか）。イノシシとしたものは、家畜化されたブタであるものも少なくない。

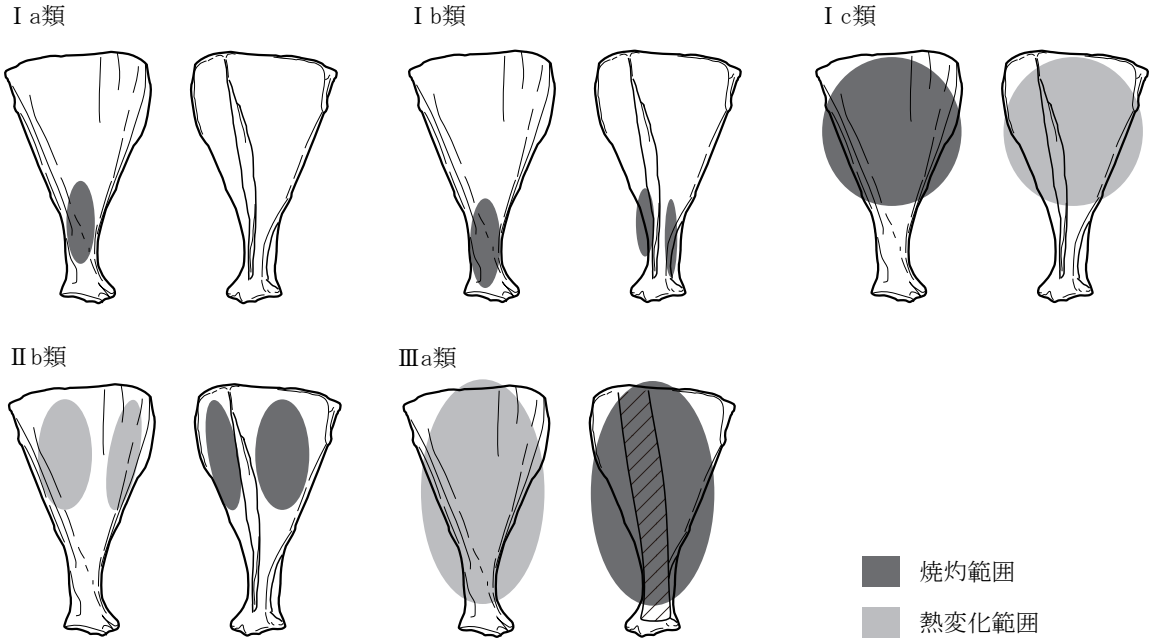
部位としては、肩胛骨（第２図）のほか、寛骨・肋骨・椎骨・下顎骨などがある。肩胛骨は扇形を呈する骨で、肩胛頚が比較的厚い部分であるのに対し、肩胛下窩や棘上窩・棘下窩は薄い部分であり、熱が裏面に伝わり易い。焼灼する箇所により、焼灼痕や焼け罅の発生状況には差異が生じる。また背側面には肩胛棘と呼ばれる突起があり、特にイノシシでは棘下窩側に大きくせり出している。寛骨は骨盤を構成する厚手の骨で、比較的広い面積を焼灼に利用できる。肋骨は、本数としては動物１個体から多数確保できるが、細長いもので、焼灼可能部分は幅狭である。

2. 焼灼方法（第３図）

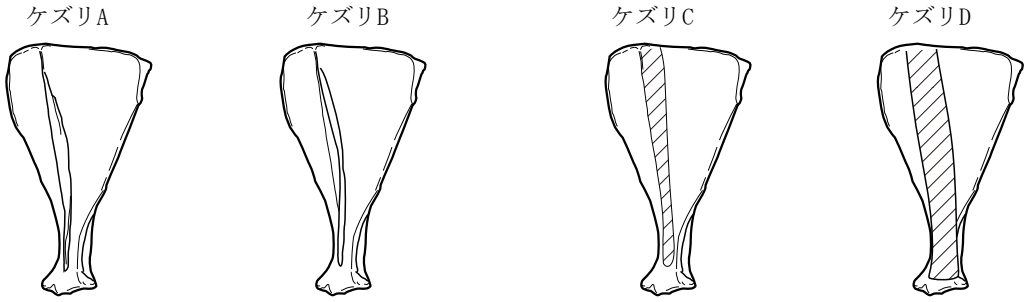
中心となる焼灼位置に注目して分類をおこなう。複数の分類に跨る要素を持つ事例については、



第2図　肩胛骨（背側面）



第3図　焼灼パターン模式図



第4図　ケズリ模式図

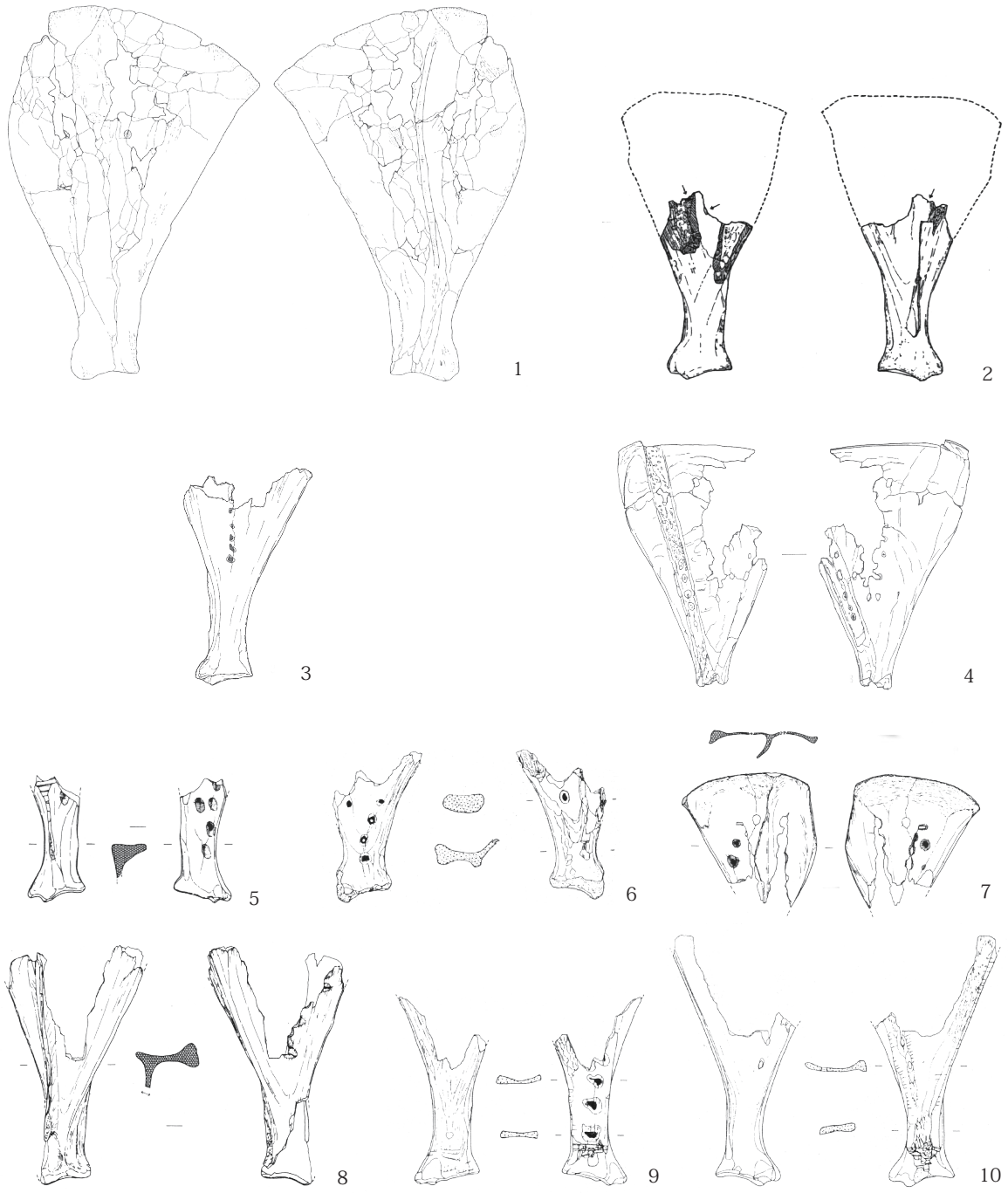
より主体的な焼灼方法を優先することとする。
Ⅰ類：骨の比較的厚い部分に焼灼するもの。焼灼による焼け罅は基本的に同一面に発生するため、焼灼面（焼灼を行う面）と卜占面（焼け罅の発生する面､即ち占いの結果を判断する面）は一致する。このうち､素材および焼灼箇所により､3つに細分する。神澤氏の第Ⅱ形式は､この類型に分類できる。
　Ⅰａ類：肩胛骨を利用する。肩胛頚～肩胛下窩の厚い部分を中心に肋骨面から焼灼をおこなう。北浦氏分類の「焼灼1」に対応する。
　Ⅰｂ類：肩胛骨を利用する。肋骨面だけでなく、更に背側面や肩胛棘側面など複数面から焼灼をおこなう。
　Ⅰｃ類：肩胛骨以外の部位を利用する。
Ⅱ類：骨の比較的薄い部分に焼灼するもの。焼灼による焼け罅は基本的に裏面に発生するため、焼灼面と卜占面が分離する。素材は肩胛骨に限られる。焼灼箇所により、2つに細分する。
　Ⅱａ類：肩胛骨を利用する。肩胛下窩の薄い部分に肋骨面から焼灼をおこなう。北浦氏分類の「焼灼2」に対応。
　Ⅱｂ類：肩胛骨を利用する。棘上窩や棘下窩に背側面から焼灼をおこなう。
Ⅲ類：骨の薄い部分に焼灼を加える点ではⅡ類と共通するが、ケズリにより扁平にした部分を含めて焼灼するもの。焼灼面と卜占面は分離する。焼灼前の加工から、2つに細分する。
　Ⅲａ類：肩胛棘など突起部を除去した部分にも焼灼をおこなう。
　Ⅲｂ類：肩胛棘など突起部を除去した上、予め円形～楕円形の窪み（鑽）を彫り込んだ部分に焼灼をおこなう。神澤氏の第Ⅲ形式に該当する。

3. 加工方法

焼灼前の素材の加工（「整治」）方法については、以下のように分類する。
「ケズリ」とは、原材の突起部を刃物などにより除去し、扁平な素材を作出する工程である。ケズリ箇所については、肩胛骨では、背側面の肩胛棘や肋骨面の肥厚部などがある。このうち、焼灼に直接関連するもののみ対象とする（第4図）。
　ケズリＡ：ケズリを行わないもの。肩胛棘が破損するなどして不明瞭なものについては、折り取りなど刃物を用いない除去方法が存在した可能性がある[4]が、加工の痕跡を判断できない以上、この型式に含めることとする。
　ケズリＢ：突起部の上部のみを除去するもの。肩胛棘が対象となる。
　ケズリC:突起部を根元から全去し、扁平に近い状態にしたもの。素材に対して横から刃を入れる。肩胛棘や肋骨面の前縁・後縁肥厚部が対象となる。
　ケズリＤ：突起部を根元から全去するもの。肩胛棘では、背縁側から素材を縦に半截して関節窩まで除去するとともに、更に前縁・後縁なども除去するもの。肋骨面でも肥厚部を除去するものがある。厚さ5mm以下の完全に平板な素材としている。
「ミガキ」は、素材の表面に刃物などで擦痕を加えるものである。素材に光沢を出し、焼け罅を発生しやすくする、明瞭にさせる、焼灼道具を安定させる、などの目的が想定される（神澤1990、鳥取県教育文化財団2001など）。

3. 地域的な特徴

上記の分類に基づき、各地の出土資料を概観していく。帰属時期については、特に断らない限り報文での記載に準じる。なお、庄内式・廻間Ⅱ式の出現をもって古墳時代とし、布留式の出現は古



1・2：原の辻（長崎）
3・4：牟田寄（佐賀）
5・7・8：足守川加茂Ｂ（岡山）
6・9・10：上東（岡山）

第５図　ト骨（北部九州・瀬戸内）

墳時代前期中葉と位置づけることとする。

イ．北部九州

九州での卜骨は、壱岐島や有明海沿岸で出土しており、南九州では確認されていない。

壱岐島出土資料のうち、カラカミ遺跡では、Ⅱａ類がみられる。素材への加工は見出せない（木村1979）。原の辻でも同様にⅡａ類であるが、中期中～後葉に比定される高元地区7号竪穴住居跡などで、肩胛棘の上部や肋骨面の肥厚部にケズリＢをおこなうものが存在する（第５図１・2）（芦辺町教委1995、長崎県教委2005）。焼灼は背側面からで、Ⅱａ類に該当する。有明海沿岸では、牟田寄遺跡（佐賀県佐賀市）（佐賀県教委2008）で、弥生時代後期前・中葉にはⅠａ類・Ⅱａ類・Ⅱｂ類と、卜占面と焼灼面の分離するものと一致するもの（第５図3）、焼灼面が肋骨面からと背側面からと、複数の所作が存在している。弥生時代後期末の流路出土資料（第５図4）では、Ⅲａ類がみられる。加工としては、背側面の肩胛棘～関節窩だけでなく、肋骨面の後縁肥厚部をも対象としたケズリＤがなされ、焼灼は、背側面の肩胛棘削平部分、肋骨面の後縁削平部分および肩胛下窩の薄い部分と、両面から行われる。いずれも卜占面は裏面となる。

九州地方では、素材はシカ・イノシシの肩胛骨に限られ、焼灼方法はⅡａ・Ⅱｂ類が中心である。加工としては、ケズリの手法が中期前～中葉の原の辻遺跡から存在する。外側面の肩胛棘～関節窩だけでなく、肋骨面の肥厚部をも対象とする事例が存在することが特徴である。ケズリ箇所にも焼灼をおこなうⅢ類の出現は後期末である。

ロ．瀬戸内

岡山平野・道後平野で出土事例がある。

弥生時代前期に帰属するものが阿方遺跡（愛媛県今治市）で出土している。シカの肩胛骨を素材とし、肩胛下窩を焼灼対象とするもので（愛媛県埋文2000）、Ⅱａ類に該当する。

弥生時代後期前葉には、足守川加茂Ｂ遺跡（岡山県岡山市）土坑35での出土資料がある。Ⅱｂ類で、肩胛下窩に３列程度の焼灼をおこなう（第５図7）。後期後葉を中心とする同Ｂ遺跡貝塚１では、肩胛頚側で背側面・肋骨面の両面から焼灼するⅠｂ類（第５図5）と、肩胛下窩の薄い部分に焼灼するⅡｂ類（第５図8）の二者が存在する。いずれの類型においても、肩胛棘の上方を除去するケズリＢが存在する。また、未焼灼資料においても、肩胛棘や肋骨面の後縁肥厚部を除去するケズリＣがみられる（岡山県1997）。

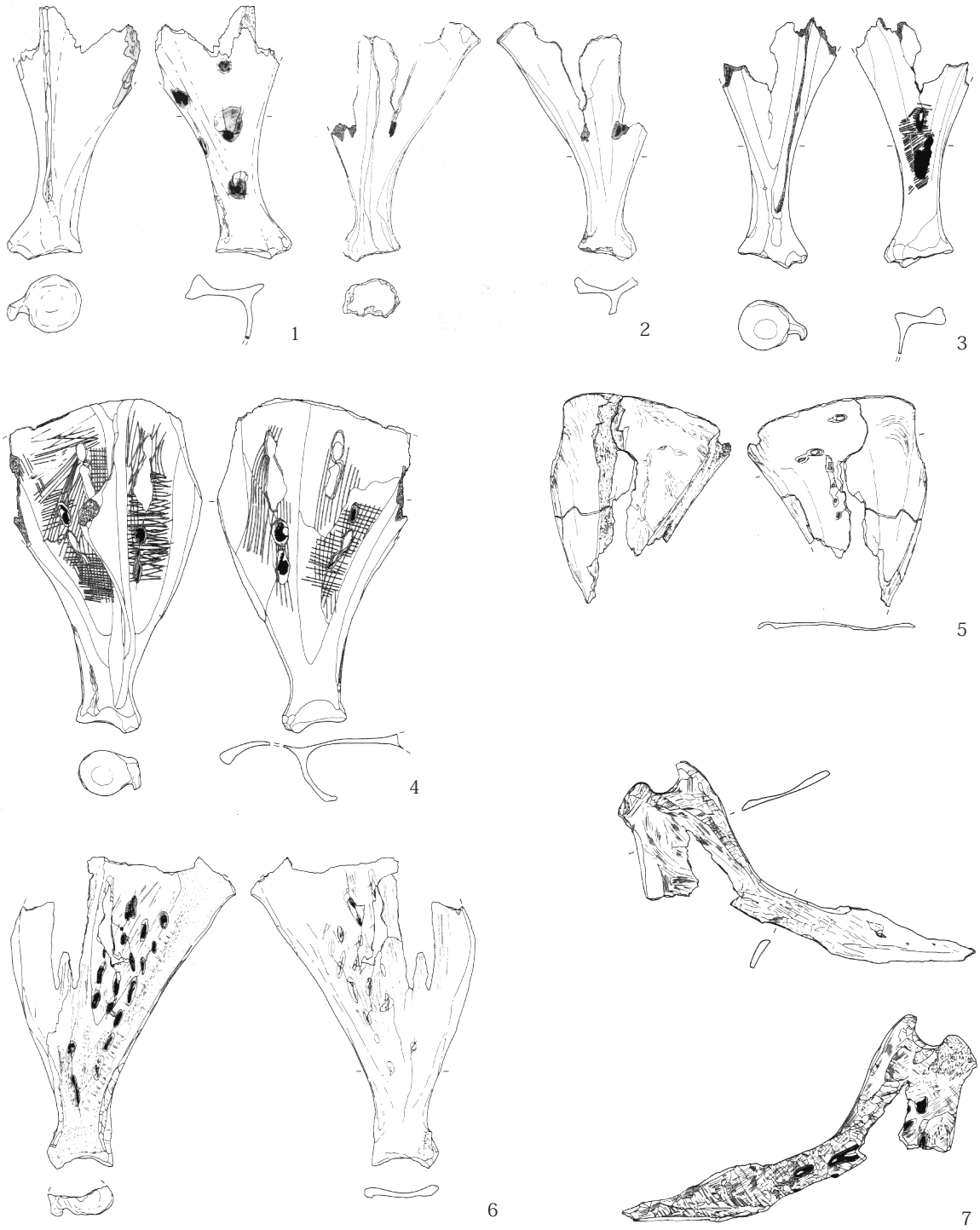
弥生時代終末期～古墳時代初頭では、上東遺跡（岡山県倉敷市）（岡山県2001）などにおいて、前段階の足守川の事例と同様にⅠｂ類（第５図6）が存在する一方、ケズリＤにより削平した部分も含めて焼灼するⅢａ類（第５図9）や、削平部分に鑽を刻むⅢｂ類（第５図10）もみられるという[5)]。瀬戸内海を隔てた宮前川遺跡群（愛媛県松山市）の古墳時代初頭の事例では、肩胛棘～関節窩を対象にケズリＣ・Ｄをおこなう。焼灼は肋骨面からのⅡａ類、背側面からのⅢａ類があり、それぞれケズリＣ・Ｄと組み合う（愛媛県埋文1998）。

瀬戸内海沿岸の事例は、弥生時代後期を初現とする。後期前～中葉では、一部はケズリＢ・Ｃを利用しつつ、Ⅰｂ・Ⅱａという異なる系統の卜占手法が成立していた。弥生時代後期～古墳時代初頭には、前段階のⅠｂ類が残存する一方で、ケズリＤ＋焼灼Ⅲａ類の組み合わせが成立している。

ハ．山陰

島根半島や鳥取平野で出土事例がある。特に青谷上寺地遺跡（鳥取県鳥取市、旧青谷町）では、弥生時代中期中葉から古墳時代前期に至るまで、240点を超える出土点数があるという（鳥取県教育文化財団2001・2002、河合ほか2011など）。

弥生時代前期のうち、古浦遺跡（島根県松江市）では、シカの中手骨を縦に半截した上で、円形の鑽を刻み、鑽の内部に焼灼を加えている（金関1975）。神澤氏が第Ⅳ形式としたもの[6)]。青谷上寺地遺跡では、弥生時代前期中葉から卜骨の事例が認められる[7)]。前期の段階で既に、肩胛頚付近に



1～6：肩胛骨　　7：下顎骨

1～7：青谷上寺地遺跡（鳥取）

0　10cm

第6図　ト骨（山陰）

焼灼するⅠａ類と、肩胛下窩に焼灼するⅡａ類の両者が存在しており、ケズリの手法としても肩胛棘を根元付近まで除去するケズリＢ・Ｃがみられる（第６図２・３）。

中期段階では、Ⅰａ類も残るが、大半は肩胛下窩を対象とするⅡａ類となる（第６図４･５）。ケズリＢ･Ｃを加えるものが過半を占める。素材の表面には縦横のミガキが顕著である。また、中期後葉の特筆すべき遺構として、肩胛骨を素材とした卜骨を左右一対で８個（４対）並べて配置した「卜骨集積遺構」（鳥取県教育文化財団 2000）が挙げられる。

後期には、ケズリ手法はケズリＤが成立し主体となる一方で、ケズリＢ・Ｃも存続する。ケズリＤのあるものは大半が削平部分にも焼灼をおこなうⅢａ類（第６図６）であるが、ケズリＢ・Ｃのものでは肋骨面から焼灼するⅠａ･Ⅱａ類と組み合う。ケズリを行わないものは少数となる。Ⅱａ類は、前段階と比較すると、素材の縁辺まで焼灼対象とするものも少なくない。素材の焼灼可能面積が飛躍的に拡大したことを受け、両面の扁平な部分から焼灼を行うものも存在する。素材の面では、イノシシ下顎骨が加わる（第６図７）。ケズリＤにより素材を半截し扁平にした部分に焼灼をおこなうという手法から、Ⅲａ類に位置づけられる。

山陰では、青谷上寺地遺跡のみの分析ではあるが、前・中期の「Ⅰａ・Ⅱａ＋ケズリＢ・Ｃ」→後期の「Ⅱａ＋ケズリＢ・Ｃ」／「Ⅲａ＋ケズリＤ」という変遷をみることができる。なお、焼灼は基本的に楕円形の工具によっており、焼灼痕は概ね 1.5 ～ 2cm の間隔をもって存在している。

ニ．畿内

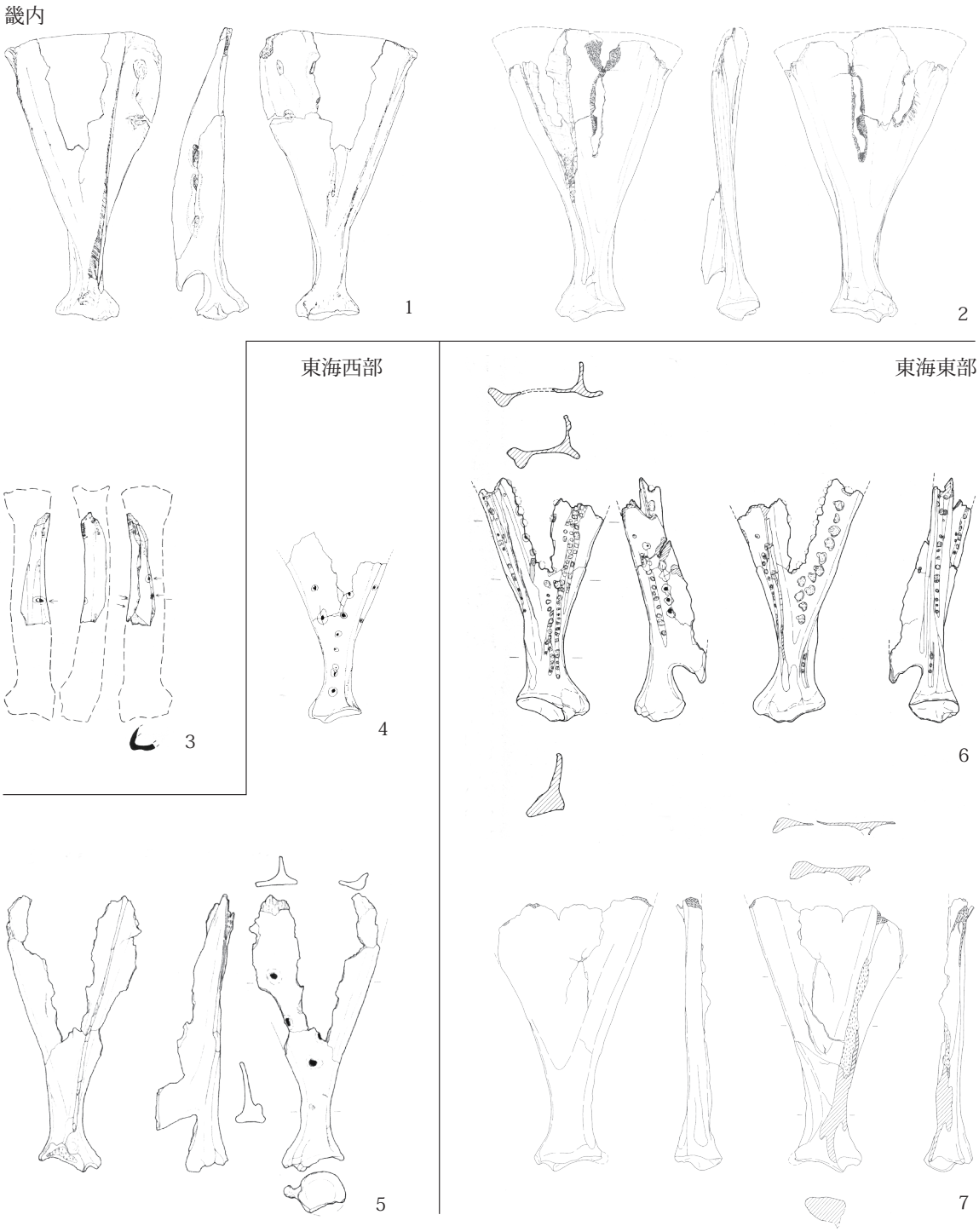
大阪平野や大和盆地で出土事例があるほか、未焼灼であるがケズリの存在から卜骨の可能性のあるものが神戸市・新方遺跡で出土している（神戸市教委 2003）。

事例の多い唐古・鍵遺跡（奈良県田原本町）を中心に変遷を辿ると、弥生時代前期には、肩胛骨のほかイノシシ橈骨（第７図３）・大腿骨が利用される。焼灼はⅠａ類（肩胛骨）・Ⅰｃ類（橈骨）と卜占面と焼灼面が一致するもので、整治は行われない。Ⅰａ類は肩胛頚を中心とするが、骨端に近い側は利用しない。弥生時代中期中葉（Ⅲ様式期）には、唐古以外にも畿内の大集落において出土事例があり、その多くでⅠａ類とⅡａ類が共存する状況が認められる（Ⅰａ類の例：第７図４）。前者は前段階に比べて焼灼範囲が肩胛下窩付近まで広がり、薄い部分も焼灼対象とするようになる。焼灼による熱変化は一部では背側面にもみられるものの、肩胛頚側は肋骨面が卜占面となるため、Ⅰ類の範疇に含めておく。後者は肩胛下窩の薄い部分を主たる焼灼箇所とする[8]。なお、肩胛骨の肋骨面のみでなく、側面や肩胛棘側面などをも焼灼対象とするものがある。動物種では、シカとイノシシの比率が１：３で、イノシシが多いようである。

弥生時代後期では、唐古・鍵遺跡の後期前葉（大和Ⅴ -1 期）で出土事例があるのみである（田原本町教委 2009）。65 次 SK134 出土資料は、棘上窩・棘下窩に列状に焼灼を加えるⅡｂ類で、大型の焼灼がみられる[9]。65 次 SK115 出土資料（第７図２）では、肩胛棘を根元から除去し（ケズリＤ）、棘下窩および削平部分を焼灼箇所とするⅢａ類である。ケズリは関節窩側までは及ばない。唐古の後期の資料は全て背側面からの焼灼であり、肩胛棘の削平といった手法も出現する。なお、後期中葉以降の事例は確認されていない。

畿内では、弥生時代前期にⅠａ･ｃ類が、中期にはⅡａ類が成立し、併存している状況が窺えるが、後期ではその２種類を主体としていた状況が一変し、肩胛棘にケズリをおこない、肋骨面を卜占面とするⅡｃ・Ⅲａ類という新たな卜占手法が成立する。

畿内では後期中葉以降は、蔀屋北遺跡・鍋田川遺跡[10]など古墳時代中期まで卜占の事例は見出せない。蔀屋北の事例は、素材はシカの肩胛骨であり、肩胛棘にケズリＣを認める。焼灼は削平部分ではなく肋骨面からであり、長楕円形の「鑽」を連続的に刻むものである（大阪府教委 2010）。焼灼面のみに注目すれば、弥生時代中期の事例との共通性がみられよう。



1・2・4～7：肩胛骨　　3：橈骨

1：亀井（大阪）　　2・3：唐古・鍵（奈良）
4・5：朝日（愛知）
6：長崎（静岡）　　7：瀬名川（静岡）

0　10cm

第７図　卜骨（近畿・東海西部・東海東部）

ホ．東海西部

濃尾平野や伊勢・三河湾沿岸で事例がある。

朝日遺跡（愛知県清須市）では、弥生時代中期前葉（朝日式）～後葉（高蔵式）に帰属するⅠa・Ⅱa類がみられる（第7図4・5）（愛知県教委1982、愛知県埋文1992・2000・2007）。Ⅰa類には、肩胛頚のみのものと、肩胛下窩にまで及ぶものがあり、徐々に後者に移行していくように見受けられる。一部では側面にも焼灼する。整治は認められない。白浜遺跡（三重県鳥羽市）では、中期中葉～後葉に位置づけられるⅠa類が出土している（本浦遺跡群調査委員会1990）。いずれもイノシシの肩胛骨が若干多い。

東海西部の卜骨はⅠa・Ⅱa類が主体である。畿内の大部分と軌を一にするように、中期末で骨による占いは途絶するようである。

ヘ．東海東部

静岡平野を中心に、田方平野などでも出土事例がある。

静岡平野のうち、石川遺跡の例は、肩胛頚を対象としたⅠa類である。長崎遺跡（静岡県静岡市）では、肩胛骨を利用するⅠb類がみられる（第7図6）（静岡県埋文1991）。肩胛骨の背側面・肋骨面の両面、更には側面に、肩胛頚から縁辺部まで夥しい数の焼灼を加えている。1個の焼灼痕は径5mm前後と小規模である。焼け罅も不鮮明であり、多量の焼灼を加えることに主眼が置かれた可能性がある。焼灼前の加工としては、（第7図6）で焼灼列を予定する箇所を予め筋状に掘り窪めているようである。時期は弥生時代後期中～後葉であろう。瀬名川遺跡（静岡県静岡市）では、焼灼自体は行われていないものの、肩胛棘をケズリDにより除去したものがみられる（第7図7）。伴出土器から、時期は弥生時代後期後葉～古墳時代前期と考えられる（静岡県埋文2008）。

田方平野の八反畑前田遺跡（静岡県三島市）では、肩胛下窩を対象とするⅡa類がみられる。包含層出土のため帰属時期は判然としないが、弥生時代後期と考えられる（静岡県埋文1997）。長崎遺跡の例とは異なり、焼灼痕の数はごく少ない。

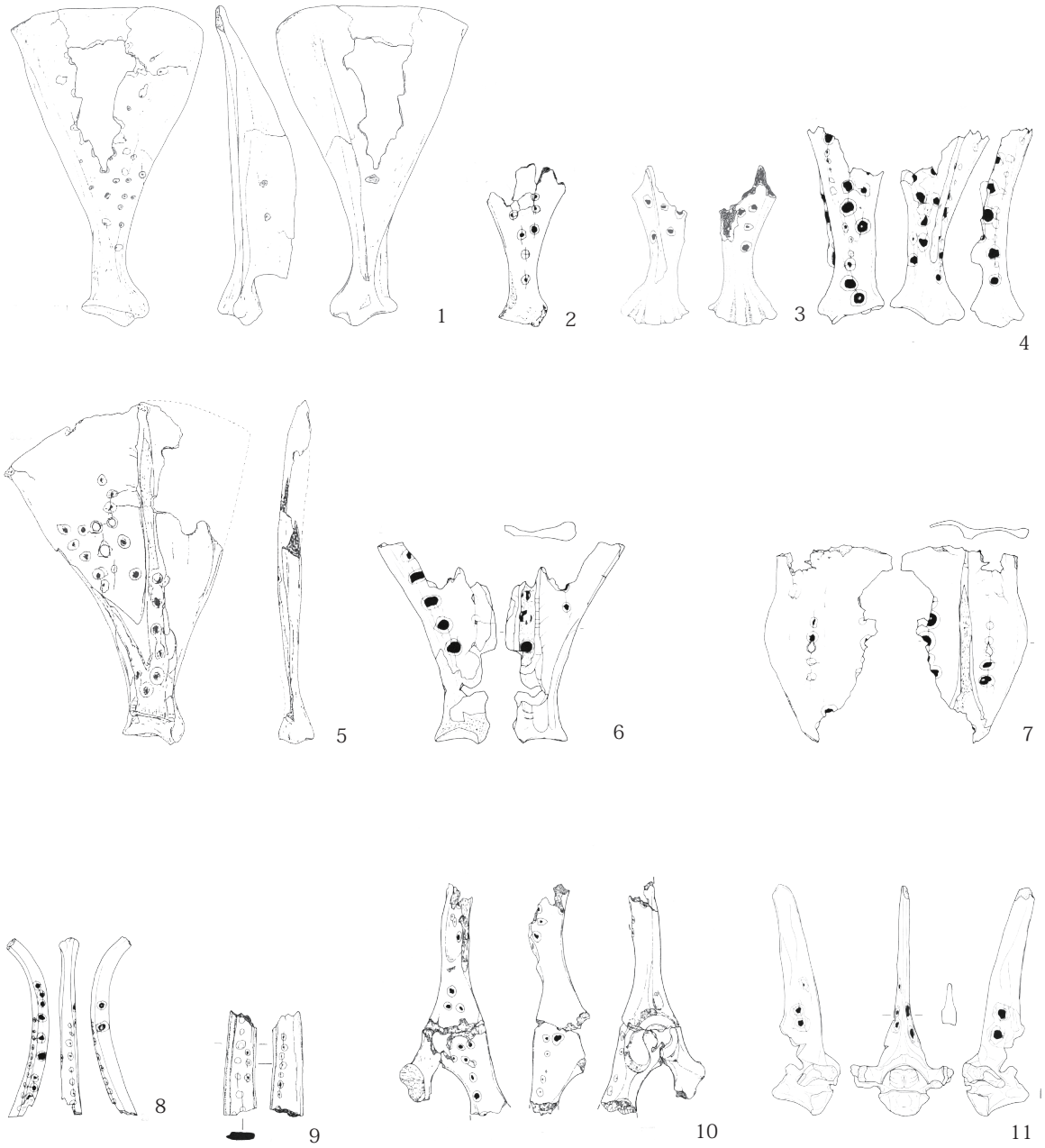
この地域では弥生時代後期以降に卜占の事例が確認される。素材はいずれも肩胛骨である。基本的には卜占面と焼灼面の一致するⅠa・Ⅰb類が普及する。弥生時代後期末～古墳時代初頭にケズリの手法が導入される。なお、動物種ではシカとイノシシとが拮抗している。

ト．南関東

出土点数・遺跡数は多く、分布範囲も足柄平野・相模川中流域・三浦半島（西岸・先端部・東岸）・東京湾東～北岸、外房と広大である。古墳時代後期～平安時代に帰属する資料も多いことから、連続性に注目した研究が進められている地域でもある（中村1996・2002、押木2004など）。

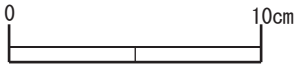
当地域の卜骨の初現は、弥生時代中期中～後葉に求められ、東京湾東岸や三浦半島に分布する。海蝕洞穴群の利用もこの段階で開始される。菊間遺跡（千葉県市原市）11号住居跡内貝層などは、シカの肩胛骨を利用したⅠa類である（千葉県都市部1974）。一方、池子遺跡群（神奈川県逗子市）№1-A地点旧河道の資料では、大半が肩胛下窩の薄い部分を中心に焼灼するⅡa類である（第8図1）。肩胛棘側面にも焼灼するものがある（かながわ考古学財団1999b）。この段階の動物種としては、シカの利用が顕著である。

後期前葉～中葉にも引き続き、三浦半島の海蝕洞穴群や東京湾東～北岸に分布する。海蝕洞穴群は該期が最盛期を迎える。肩胛骨では、前代からのⅠa類（第8図2）に加え、複数面を焼灼するⅠb類（第8図3）がみられる一方、Ⅱa類は確認できない。各々の面での対象箇所としては、肩胛頚や前縁・後縁の縁辺部など厚みのある箇所が選好されており、縁辺まで利用する傾向がある。また列状に焼灼をおこなうようになる。肋骨や寛骨といった、肩胛骨以外の部位を利用するⅠc類が顕著となることも、この段階での特徴である。肋骨は幅狭の素材であり、1面当たりの焼灼可能面積が



1～7：肩胛骨　8・9：肋骨　10：寛骨　11：椎骨

1：池子№1-A 地点（神奈川）
2：毘沙門 C 洞穴（神奈川）　3：海外洞穴（神奈川）
4・6～8・11：こうもり穴洞穴（千葉）
5：池子№1-A 東地点（神奈川）
9：間口洞穴（神奈川）　10：草刈（千葉）



第 8 図　ト骨（南関東）

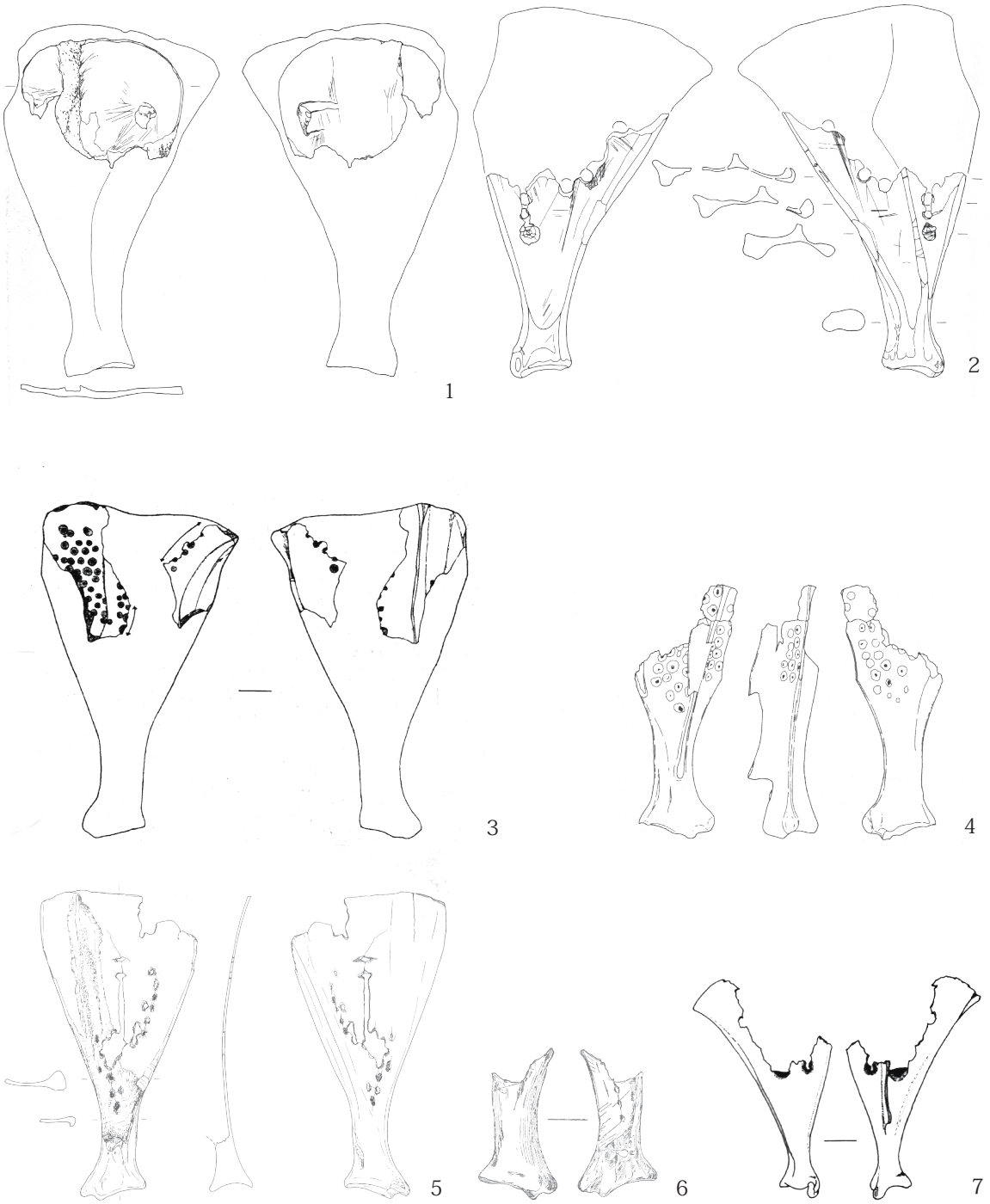
限られるため、焼灼痕は5mm前後の小型のものを列状に施すもの、複数面を利用するものが過半を占める（第8図9）。寛骨は比較的広い平坦面が得られるもので、複数面が利用される。肋骨と比べて大型の焼灼痕が並ぶ（第8図10）。

弥生時代終末期から古墳時代前期においては、新たに足柄平野・三浦半島東岸・外房などに分布が拡大する。素材としても椎骨が加わる。注目されるのは三浦半島の遺跡群とこうもり穴洞穴（千葉県勝浦市）である。三浦半島の海蝕洞穴群では肩胛骨・肋骨によるⅠb・Ⅰc類が隆盛しており、池子遺跡群の№4地点の溝状遺構においても、肩胛骨のⅠa類、肋骨・寛骨によるⅠc類と、卜占面と焼灼面の一致したものがみられる（かながわ考古学財団1999a）。それに対し同№1-A東地点の埋没谷での出土資料（かながわ考古学財団1999c）は、肋骨・寛骨などを素材とする複数面焼灼のⅠc類が存在する一方で、肩胛骨では第8図5）などⅢa類に該当するものが存在する。肩胛棘～関節窩や前縁の遠位側などをケズリDにより根こそぎ除去し、削平部分および棘下窩を焼灼対象としている。両地点は、ほぼ同時期に帰属し、距離も直近であるにも関わらず、こと肩胛骨の利用形態には大きな断絶がある。そして三浦半島東岸でも、鉞切遺跡（神奈川県横須賀市）などでⅢa類が出現するに至る。同様にこうもり穴洞穴（千葉大学文学部考古学研究室2002・2003）においても、肩胛骨のⅠb類（第8図4）、肋骨・寛骨・椎骨を素材とするⅠc類（第8図8・11）といった、卜占面と焼灼面の一致するものが過半を占める一方で、肩胛骨ではⅡa・Ⅲa類があり、ケズリの手法としてもケズリB・C・Dの各段階が認められる（第8図6・7）。Ⅲa類には、背側面の削平部分を焼灼するだけでなく、肋骨面や側面などを合わせて焼灼するものが少なくなく、Ⅲa類とⅠa・b類が融合したような状況が看取される。

南関東では、三浦・房総半島とも中期には出現する。卜占面と焼灼面の一致するもの（三浦半島の海蝕洞穴群・房総半島）と分離するもの（池子遺跡群）の両者が存在する。後期になると、海蝕洞穴群を中心にⅠb・c類のような一致型が隆盛する。この段階まで整治をおこなうものは存在しない。しかし後期後葉から古墳時代初頭にかけては、ケズリをおこなうもの、卜占面と焼灼面とが分離するものが出現する。遺跡（群）内でも従来の方法と新来の方法とが混在しており、過渡期の状況が看取される。ところで、肩胛骨以外の分布をみると、肋骨は三浦・房総半島の海蝕洞穴群や池子遺跡群・三浦半島東岸、寛骨は房総半島の海蝕洞穴群・東京湾東～北岸・池子遺跡群・足柄平野となり、池子遺跡群などで重複があるものの、異にしており、漁撈主体の集団と農耕主体の集団という構図を抽出できるかもしれない。

チ．北関東・中部高地

新保田中村前遺跡（群馬県高崎市）2-1･2号河川跡下層出土資料（第9図1･2）（群馬県埋文1994）は、肩胛骨を利用し、肋骨面の肩胛下窩に焼灼するⅡa類である。ケズリとしては、肩胛棘を対象にケズリB･Cがみられるほか､背縁を一回り削り落として縁辺を丸く仕上げたものがみられる（第9図1）。ミガキとしては、骨の両面に縦横に走る擦痕がみられる。方向に規則性は見出しにくい。時期は弥生時代後期後葉～古墳時代初頭である[11)]。動物種はシカとイノシシとが拮抗している。生仁遺跡（長野県千曲市）Y-8号住居跡出土資料（第9図3）（長野県考古学会1969）もⅡa類である。肩胛下窩でも遠位側に、40ヶ所以上の焼灼痕が残っており、その配置からみると、列を意識して焼灼したとは思われない。整治としては、ケズリBにより肩胛棘の上半を除去しているようである[12)]。弥生時代後期中葉の所産であろう。同遺跡18号住居跡出土資料（更埴市遺跡調査会1989）や石川条里遺跡23号住居出土資料（長野市教委1994）では、肩胛頚に複数面から焼灼をおこなうⅠb類（第9図4）や、寛骨に両面から焼灼をおこなうⅠc類がある。卜占面と焼灼面の関係が異なる複数の焼灼方法が存在するが、1つの面に対し多数の焼灼を乱雑におこなう点では共通しており、素材に焦げ目を付することを第一義としていたものと考えられる[13)]。長野盆地では他にも、四ツ屋遺跡などで住居跡



1・2：新保田中村前（群馬）
3・4：生仁（長野）
5：畝田（石川）
6：千種（新潟）
7：浜端洞穴（新潟）

0　10cm

第 9 図　卜骨（北関東・中部高地・北陸）

出土資料がある[14)]。

北関東･中部高地とも、弥生時代後期中葉が初現となる。焼灼方法はⅡａ類が中心であるが、Ⅰｂ･Ⅰｃ類も存在する。加工としてケズリ・ミガキが存在する。

リ．北陸

畝田遺跡（石川県金沢市）SD05 出土資料（第 9 図 5）（石川県埋文 1991）は、肩胛棘や前縁・後縁をケズリＤにより除去した上で、背側面の削平部分および棘下窩に列状に焼灼を行っており、Ⅲａ類に該当する。

新潟・佐渡島の千種遺跡（第 9 図 6）（新潟県教委 1953）や浜端洞穴（立教大学考古学研究会 1969）での出土資料は、神澤氏により第Ⅲ形式に分類されているが、実測図をみる限り、素材のケズリは認められるものの、鑽のような焼灼部分の事前の彫り込みは見出しにくいように思われるため､Ⅲａ類として扱う。浜端洞穴ではこのほか､ノウサギの肩胛骨を素材とするⅡｂ類が存在する（第 9 図 7)。素材に整治はみられない。神澤氏が特異な事例とした第Ⅰ形式に該当するものである。

北陸の事例は、焼灼はⅢａ類、ケズリＤによる。時期は弥生時代終末期から古墳時代前期初頭に比定される。

ヌ．分布からみた特徴

列島内の分布としては、九州から関東まで、弥生文化が波及した地域には概ね満遍なく広がっている。後期でより分布範囲が拡大する。

卜骨出土遺跡の立地をみておくと、大きく 2 つの位相が確認できる。一方は、三浦・房総半島や佐渡島の海蝕洞穴、伊勢・三河湾岸や壱岐島の海浜集落など、漁撈や海上交通に従事する人々の生活拠点である。居所としての規模は小さく、また恒常的なものではない。骨角製ないし鉄製の漁撈具や動物遺体の出土が目立つ、といった特徴を見出すことができる。他方は所謂「拠点集落」と呼である。唐古・鍵や朝日などが典型的で、水陸交通の要衝に位置し、集住の進んだ大集落である。出土する遺構も、流路・大溝、井戸、大型住居など、集落の共同場所と見做せる場所が多い。

4. 各類型の消長

Ⅰａ類

北部九州・瀬戸内・山陰・畿内・東海西部・東海東部・南関東と広範な範囲で確認される。帰属時期は弥生時代前期～中期が中心で、焼灼に当たっては肩胛頚を中心に、一部は肩胛下窩にかけて、径 1cm 前後の焼灼を数個おこなう。畿内や山陰での下限の時期は、唐古・鍵遺跡ではⅢ-2 期（93 次 SK2120）（田原本町教育委員会 2009)、青谷上寺地遺跡では中期中葉など、中期中葉までに限られるようである。後期以降も事例が確認されるのは北部九州・瀬戸内と南関東で、特に南関東では次第に肩胛頚に近い方まで降る。なお、中期の畿内や東海西部では、若干数であるが、肋骨面だけでなく側面や肩胛棘側面なども焼灼対象となるものが存在する。

この類型に伴う整治としては、中期の山陰、後期の瀬戸内や南関東で、肩胛棘の上部を対象とするケズリＢが存在するが、根元までの除去には至っていない。

Ⅰｂ類

瀬戸内・東海東部・南関東・中部高地と、弥生時代中期～古墳時代前期で確認されるが、特に東日本で顕著である。肩胛骨のうち、肩胛頚の関節窩に近い側、肩胛棘側面などが焼灼対象となり、肩胛棘を挟んで焼灼面が 3 面以上となるものも少なくない。南関東では、焼灼痕は比較的大きく、

面内ではほぼ列状に並ぶのに対し、長崎など東海東部の事例では肋骨面だけで30個以上の焼灼をおこなうものがあるなど、焼灼することに重点が置かれている。同一面での卜占を前提にしたもので、中部高地でも乱雑な配置が確認される。藤野岩友氏が指摘されるような、占いに際して焼け罅より焦げ目を重視したもの（藤野1960）と言えよう。

この類型に伴う整治としては、瀬戸内や南関東で、肩胛棘の上部を削平するケズリBが存在するが、根元までの除去には至っていない。

Ⅰc類

素材としては、橈骨・大腿骨・肋骨・椎骨・寛骨がある。このうち前二者のような長い管状の素材は、弥生時代前期に散見する。一方で後三者は南関東の弥生時代後期以降に集中する。いずれも焼灼面での卜占を前提にしており、複数面から焼灼をおこなうものが殆どである。基本的に整治は行われない。

Ⅱa類

弥生時代中期には、北部九州・山陰・畿内・東海西部・南関東と、東日本まで波及する。1個の焼灼痕の規模は西日本で比較的大きい。後期～古墳時代初頭には山陰のほか瀬戸内・北関東・北陸などでも確認される一方で、南関東や東海東部では殆ど認められない。前・中期段階の山陰でケズリB・Cと組み合う。畿内以東では、中期にはケズリ手法が認められない一方、後期にケズリB・Cが利用されることから、一系統で捉えられるか疑問も残る。

Ⅱb類

中期の北部九州、後期前葉の畿内、古墳時代初頭の北陸と、散在的に認められる。ケズリが確実に伴う訳ではないが、畿内・北陸ともⅢa類と伴出している。

Ⅲa類

山陰や畿内では弥生時代後期に出現しているが、弥生時代終末期以降に北部九州・瀬戸内・山陰・北陸・南関東など各地で認められるようになる。

基本的には肩胛骨を素材とし、背側面から焼灼をおこなう。ケズリは、背縁側から関節窩に向けて縦に半截し、肩胛棘や前縁・後縁など突起部を除去するケズリDによることを所与の前提としている。西日本では肋骨面の肥厚部をもケズリの対象とするものが存在する。複数面から焼灼するものとして、牟田寄遺跡では両面とも肥厚部を除去しており、除去した部分も含めて焼灼をおこなっている。青谷上寺地遺跡では下顎骨を利用したものが認められる。なお、神澤氏が第Ⅲ形式とした浜端洞穴・千種遺跡出土の卜骨は、実測図をみる限り、肩胛棘の削平は認められるものの、鑽のような焼灼箇所の掘り込みは認められないため、この類型に分類した。

Ⅲb類

弥生時代前期の中手骨を素材をする山陰、古墳時代初頭の肩胛骨を対象とする瀬戸内の事例が認められるのみで、当該期の卜占手法としては主体的でない。

5. 卜骨の系譜と列島における消長

1）朝鮮半島から列島へ

卜占の技術体系の系譜を考えるに当たって、先ず東アジアの事例をみてみる。列島の卜占方法は朝鮮半島南東部からの伝播と考えられる（新田1977・渡辺1995など）。列島の弥生時代～古墳時代

前期に先行または並行する時期のものとして、初期鉄器時代から原三国時代までの事例が12遺跡で存在する[15]。その多くは、シカやイノシシ・ブタの肩胛骨を素材とし、肋骨面から肩胛下窩の薄い部分に焼灼をおこなうもので、卜占面と焼灼面が分離するⅡｂ類である。注目される事例を挙げると、先ず初期鉄器時代に帰属する勒島貝塚では、肩胛棘上半の削平（ケズリB）、肩胛下窩での大型の焼灼痕などの点では青谷上寺地遺跡など西日本の事例と共通するとともに、複数の卜骨を意図的に並べて置いた「卜骨集積遺構」が存在するなど、卜占に際しての所作にも共通性が認められる。原三国時代に帰属する東海岸・江原道の江門洞低湿地遺跡では、紀元前2世紀頃の肩胛骨（シカ・ブタ・ウシ）や下顎骨（イノシシ）を利用した卜骨が出土している。肩胛骨では肩胛棘を除去するものが存在し、一部は肩胛頚や関節窩まで削り込んでいる点、下顎骨では骨材を半截して作出した平坦面に焼灼する点、などは青谷上寺地遺跡の諸例とも親縁性がある。一方でブタの肩胛骨を素材とするものでは、肩胛下窩に円形の「鑽」を設けるものが認められる（田中ほか2006）。こうした共通性はしかし、弥生時代中期後半に並行する時期に、勒島貝塚をはじめとする朝鮮半島南東部の沿岸部に存在した集落群が衰退し、交易拠点が金海方面へ移動することで下火となる。その後は、肋骨面に平面が円形を呈する鑽を刻むものが頻出する。この手法は、弥生時代前期の古浦の事例における円形鑽の手法と同一であり、この系譜上の産物として理解できる。また列島との相違点として、背側面から焼灼するⅡｃ類および削平部分にも焼灼するⅢａ類などがほとんど確認できない点を挙げることができよう。

2）弥生時代前・中期

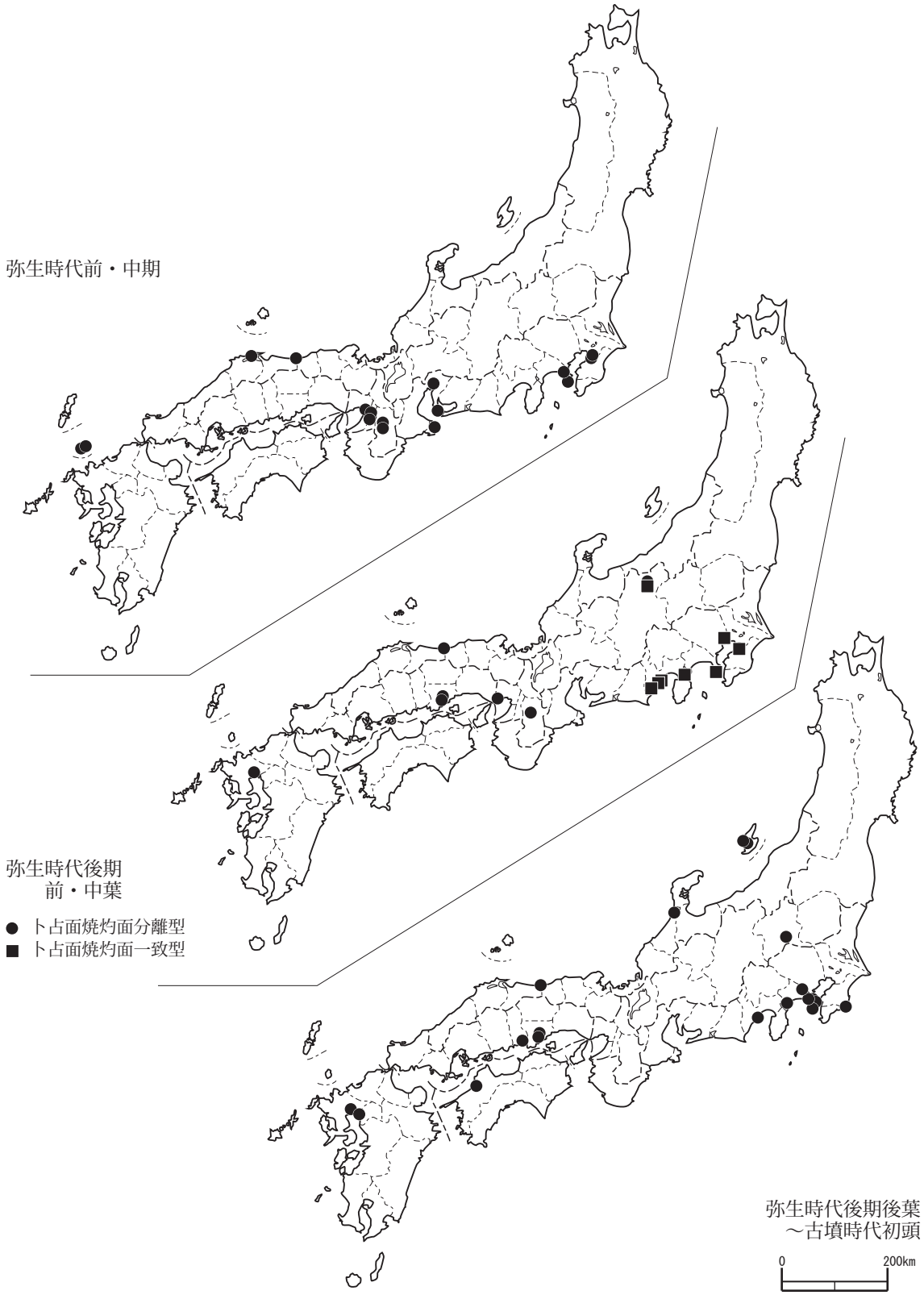
弥生時代前・中期の卜骨を概観すると、肩胛骨を利用するものでは、Ⅰａ類・Ⅱａ類が全国的に分布している。九州・山陰・畿内・東海西部・南関東で事例が認められる。Ⅰａ類・Ⅱａ類は、多量に卜骨が出土している青谷上寺地遺跡や唐古・鍵遺跡においても同時期に併存していることから、一致型（Ⅰａ）→分離型（Ⅱａ）という変遷ではなく、異なる系統のものと位置づけることができる。そこで各地域におけるⅠａ類とⅡａ類の比率に注目すると、山陰ではⅠａ：Ⅱａが1：4程度とⅡａ類が優勢である一方、畿内や東海西部ではほぼ拮抗し、南関東ではⅠａ類が優勢となる。ただし、畿内や東海西部では、中期中葉にはⅠａ類の中でも肩胛下窩に近い側を焼灼対象とするなど、Ⅱａ類との折衷とも評価できる。南関東でも、Ⅰａ主体の遺跡とⅡａ類主体の遺跡とがある。素材としては、唐古・鍵や古浦などで、長い管状の骨によるものが少なからず存在するが、弥生時代前期に限られ、中期以降には存続しない。

ケズリの手法としては、北部九州・山陰でケズリB・Cが出現している。両者とも前期中葉～中期前葉の段階で出現しており、単純なケズリB→Cという図式化はできず、ケズリと焼灼の間にも有機的な関係は認めにくい。畿内以東の地域には波及していない。

3）弥生時代後期前葉～中葉

新たに瀬戸内・東海東部・中部高地などで出現が認められる。一方で中期後葉までにⅡｂ類を利用していた地域をみると、畿内・東海西部などでは後期まで存続しない。

西日本では、山陰で前段階から継続して「ケズリB・C＋焼灼Ⅱａ類」の組み合わせが主流を占める一方で、「ケズリD＋焼灼Ⅲａ類」の組み合わせが成立してくる。ケズリDは肩胛棘～関節窩を除去し、平板な素材を作出するものであり、素材の両面を障害なく利用できるようになった点で画期的である。後期には、肩胛骨でも肩胛頚・肩胛下窩以外にも前縁・後縁周辺など骨面の端部を利用するものも青谷上寺地などで出現しており、焼灼が骨面全体に及ぶようになったことは注目される。ケズリの手法は、瀬戸内や畿内でも出現する。唐古・鍵遺跡の後期初頭の例である。「ケズリ



第 10 図　卜骨出土遺跡　時期別分布地図

Ｄ＋焼灼Ⅲａ類」の組み合わせが確認でき、ケズリ・焼灼の手法がセットで流入してきたことを窺える。一方で焼灼Ⅲａと同様に背側面を焼灼対象とするⅡｂ類も登場している。Ⅱａ類とⅡｂ類は、同じく焼灼面と卜占面が分離するものではあるが、卜占面は背側面から肋骨面へと変化する。ケズリを行った部分をも焼灼対象とするⅢａ類とは、ケズリをおこなった箇所への焼灼の有無を除けば共通するもので、Ⅲａ類の一環とみてよかろう。ケズリＤの成立により両面とも平坦面が作出されたことによって初めて、背側面から焼灼して肋骨面で卜占するⅡｂ･Ⅲａ類が出現する素地が生じる。この意味では両者は一連の技術体系に則るものと評価できる。

一方、東日本の太平洋側では、Ⅰａ類が存続するとともに、焼灼面を複数にするⅠｂ類が出現し、該期の主体的な方法として隆盛する。南関東では、肩胛頚付近を中心に、列状に焼灼をおこなうのに対し、東海東部では、肩胛骨のほぼ全面に対し、執拗なまでに焼灼をおこなう。この類型の出現は、弥生時代後期に求められようが、その端緒としては、Ⅱａ類のうち池子遺跡群№1-A 地点で確認した弥生時代中期後葉の肩胛棘側面に焼灼をおこなうものであろう。その淵源を辿ると、中期中葉の唐古・鍵遺跡や、中期後葉の朝日遺跡などを類例として抽出できることから、起源を畿内や東海西部に求めることが可能であろう。肩胛骨以外の、肋骨・椎骨・寛骨といった素材を利用したⅠａ類も、複数面に焼灼する点ではⅠｂ類と共通しており、Ⅰｂ・Ⅰｃ類は一体を成す卜占手法であったと考えられる。複数面での列状焼灼という方法が確立して以降に、他の素材に方法が応用されていったものとみられる。骨材の有効利用とも評価できよう。

大局的にみると、西日本で卜占面と焼灼面の分離するもの、東日本で両面の一致するものが主体となり、列島の東西で対照的な様相を示す。しかし微視的にみれば、南関東の内部でも利用する素材などの点で小地域を抽出できるほか、他にも焼灼Ⅰｂ類とケズリＢを伴う焼灼Ⅱｂ類とが併存する中部高地、ケズリＢ・Ｃと焼灼Ⅰｂ・Ⅱａなどが組み合う瀬戸内などの地域的な特徴を見出すことができる。各地域で独自の卜占手法、ひいては地域特有の祭祀形態が確立したのが、後期の特色と言えよう。

4）弥生時代後葉～古墳時代初頭

前段階で山陰や畿内のみで確認された「ケズリＤ＋焼灼Ⅲａ類」の組み合わせが全国的に波及しており、ケズリ手法と焼灼手法が一体のものとして他の地域に波及する状況が想定される。各出土遺跡においては、畿内・東海などを出自とする外来系土器群との共伴が顕著である。地域毎に確立していた弥生祭祀に対し、統一的な祭祀形態の確立を目指す動きの一部と考えられよう。

ただし、前段階までの在地の卜占形態に取って代わるには至らず、共存･融合する形をとっている。特に南関東では、肩胛棘の削平部分を含む背側面に焼灼するとともに、肋骨面や側面などにも焼灼を加える例があり、Ⅰｂ類との折衷的な様相を窺うことができる。肩胛骨以外の部位では、卜占手法の上で前段階と大きな差異は見出せない。また、波及の度合いをみても、西日本や東日本の日本海側では、ケズリＤが背側面での関節窩・前縁・後縁にまで及ぶが、東日本の太平洋側では顕著でないなど、受容する側の対応も一様ではない。

5）全国的にみた消長と後代への展開

以上、弥生時代前期から古墳時代初頭にわたる卜骨の消長をみてきた。簡単には図式化できないものの、幾つかの画期を想定できる。

・弥生時代前期に点状焼灼による卜占法が流入し、中期までに全国に卜占法が広がる。

・弥生時代後期には、西日本で焼灼面と卜占面の分離するもの、東日本で一致するものが主体を占

旧国名（主な遺跡）	卜骨・卜甲の出土	「卜部」「占部」の存在	神事の遺存
壱岐（原の辻など）	○	○	
因幡（青谷上寺地）		○	
河内（亀井など）	○	○	
駿河（長崎など）	○		
伊豆（八反畑前田）	○ [16]	○	
相模（池子遺跡群など）	○		
武蔵（向ヶ岡貝塚）		○	○
下総（城の腰）	○	○	
上総（草刈など）	○	○	
安房（こうもり穴など）	○		
上野（新保田中村前）			○
信濃（生仁など）	○		

第 2 表　卜骨分布地域対照表

めるが、地域差も大きく、個々の地域での卜占の技術体系が成立していた。「Ⅱｃ・Ⅲａ＋ケズリＤ」の方法も、一地域での手法にすぎないものであったとも言える。

・弥生時代後期末～古墳時代初頭には、「Ⅲａ類＋ケズリＤ」の組み合わせが全国的に波及する。

・古墳時代前期中葉には、各地で卜骨は姿を消す。それに代わる集落祭祀の形態が出現したことに依るものであろう。

古墳時代中期以降の卜骨についても一瞥しておく。古墳時代中期には、畿内や東北で認められるのみである。このうち山王遺跡（宮城県多賀城市）の卜骨は、シカの肩胛骨を利用し、ケズリＤにより肩胛棘および後縁を除去している。削平部分を含む背側面に、楕円形の鑽を設け、その内部を焼灼するもので（宮城県教委 1994）、Ⅲｂ類に位置づけることができる。一方で肋骨面には楕円形の鑽を設けて、その内部に焼灼を加えている点は、東日本の複数面焼灼の伝統に則ったものとも言えよう。

弥生時代から古墳時代初頭にかけての卜骨・卜甲の出土する地域と、古墳時代後期以降の卜骨の出土する地域、或いは史書・戸籍その他の文字史料において卜占従事者たる「卜部」「占部」の存在が確認できる地域、現在まで神事が残る地域とを比較すると、第 2 表のように概ね重なることが確認できる。特に東国で濃密に分布する。一旦考古資料の上では途絶するが、骨卜の手法としては連綿と継承されていることを窺うことができよう。

おわりに

弥生・古墳時代の卜骨を概観し、地域差・時期差にも注目したが、卜占面と焼灼面の一致型→分離型という単純な図式では割り切れないことが確認された。地域内においても、一致型と分離型、ケズリのあるものとないもの、などの多様性がある。

課題も幾つか残る。前節で卜骨の出土する地域での卜占技術の連続性を指摘したが、断絶している間の集落での祭祀形態や、そこでの卜占技術者の存在形態は不明である。それは卜占従事者の性格にも関わる問題である。

また、集落祭祀における卜占の位置づけも追究できなかった。時代はやや降るが、『風土記』など古代の史料における祭祀の過程をみると、①何らかの「祟り」、言わば共同体にとっての有事の発生、②卜占による「祟り」を齎す神の特定、③卜占による司祭者の選定、④祟る神に対する祭祀の挙行、

という手順を踏んでいる（関 1994）。卜占はこの中での②③の段階で執り行われる。即ち、卜占は共同体にとって重要な意味を有するものであったと言えよう。このことを前提とすれば、素材の選択から整治・焼灼に至る一連の卜占の技術体系は、集落の規模、祭祀の内容・規模などに規制される可能性があろう。

本稿は、筆者が平成 18（2006）年に千葉大学大学院に提出した修士論文を土台としている。修論提出時を含め、以下の方々には、資料実見などでたいへんお世話になりました。記して謝意を申し上げます。

笹生　衛、田邊由美子、中村　勉、小田原市教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所、財団法人鳥取県教育文化財団、三浦市教育委員会（敬称略）。

註

1）倉野憲司校注『古事記』岩波書店。

2）本稿では直接関係しないが、神澤氏は（神澤 1990）において、第Ⅴ形式を再検討し、第Ⅵ形式を設定する必要があることを指摘している。

3）石原道博編訳『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波書店。

4）北浦氏はこのパターンを「ケズリ A ‘」と分類している。

5）報告書の記述に則る。

6）弥生時代前期の包含層での出土であり、調査を担当した金関氏はこの年代観を与えている（金関 1975）。本報告（古浦遺跡調査研究会 2005）でもこの年代で報告されている。なお、神澤氏は加工・焼灼の方法から、古墳時代中期に帰属するもので、上層からの混入としている。

7）報告書（鳥取県教育文化財団 2001・2002）の段階では、卜骨の初現は弥生時代中期中葉とされていたが、資料整理の結果、この時期まで遡る資料があることが判明したという（河合ほか 2010）。帰属時期はこちらの記載に従うこととする。

8）報告をおこなった宮崎泰史氏も、「どの面で卜するところの結果を読みとるかの違い」と指摘している。

9）この卜骨では、関節窩にも径 2cm 前後を測る大型の被熱痕がある。

10）未報告。『大東市史』では卜骨の出土したことが触れられるのみであるが、『寺川遺跡発掘調査報告書』（大東市教育委員会 2003）によれば、伴出遺物として布留式土器や石製模造品が出土しているという。

11）報告書では、在地の樽式が主体であることから弥生時代後期の帰属としているが、卜骨の出土した 2-1 号河川跡下層では、S 字甕などが出土することを重視し、古墳時代初頭まで含めておく。

12）実測図より判断。

13）この点は、貫前神社（群馬県富岡市）で毎年行われる「鹿占神事」（文化庁文化財保護部 1984）における、シカの肩胛骨に焼けた錐を押し付け、焼灼による孔の発生具合を観て吉凶を占うという卜占手法に通じるものがあり、同様の技術体系に則ったものと言えよう。

14）竪穴での出土状況の記録から判断すると、肩胛骨がほぼ完形で、残存状況は良好であるが、実測図が掲載されていないため焼灼・整治方法などは不明である。

15）（金 2002）での集成のうち当該時期に帰属する 10 遺跡に、（河合ほか 2011）で集成された會峴里貝塚・古村里遺跡の 2 遺跡を加えている。

16）卜甲としては出土していないものの、柏谷横穴群（静岡県函南町）において、多量の亀甲が玄室内に敷き詰められた事例がある。一部は被熱しているという（静岡県教委 1975）。

引用・参考文献

愛知県教育委員会 1982『朝日遺跡Ⅱ』

愛知県埋蔵文化財センター 1992『朝日遺跡Ⅲ』

愛知県埋蔵文化財センター 2000『朝日遺跡Ⅵ　―新資料館地点の調査―』

愛知県埋蔵文化財センター 2007『朝日遺跡Ⅶ』

赤星直忠・飯島重一・大塚真弘 1982「最近三浦半島で発見された古代の卜占骨」『横須賀考古学会年報』24・25
芦辺町教育委員会 1995『原の辻遺跡　高元地区範囲確認発掘調査』
石川県立埋蔵文化財センター 1991『畝田遺跡』
石原道博編訳『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』 岩波書店
右代啓視・平川善祥・小林幸雄・赤松守雄・門崎允昭・為岡進 1992「大成町貝取澗 2 洞窟遺跡第 2 次発掘調査概報」『北海道開拓記念館調査報告』31
愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998『斎院・古照』
愛媛県埋蔵文化財センター 2000『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡』
大阪府教育委員会 2010『蔀屋北遺跡Ⅰ』
財団法人大阪市文化財協会 1981「第 82 次発掘調査概報」『難波宮跡研究調査年報　1975 ～ 1979・6』
財団法人大阪府文化財センター 1983『亀井』
財団法人大阪府文化財センター 1982『亀井遺跡』
岡山県古代吉備文化財センター 1997『足守川加茂 A 遺跡・足守川加茂 B 遺跡・足守川矢部南向遺跡』 岡山県教育委員会
岡山県古代吉備文化財センター 2001『下庄遺跡・上東遺跡』岡山県教育委員会
岡山県古代吉備文化財センター 2007『津島遺跡』岡山県教育委員会
押木弘己 2004「古代鎌倉の卜骨と三浦半島　―律令期における海浜部集落の一側面―」『考古論叢神奈河』12　神奈川県考古学会
小田原市教育委員会 2007『千代南原遺跡第ⅩⅠ・ⅩⅢ・ⅩⅣ地点』
落合淳思 2006「殷代占卜工程の復元」『立命館文學』594
海外洞穴調査団 1983「三浦市海外洞穴調査の概要」『横須賀考古学会年報』26
神奈川県立博物館 1972『神奈川県立博物館発掘調査報告書　第 6 号　間口洞窟遺跡（1）　資料編』
神奈川県立博物館 1973『神奈川県立博物館発掘調査報告書　第 7 号　間口洞窟遺跡（1）　本文編』
神奈川県立博物館 1974『神奈川県立博物館発掘調査報告書　第 8 号　間口洞窟遺跡（2）』
神奈川県立博物館 1980『神奈川県立博物館発掘調査報告書　第 9 号　間口洞窟遺跡（3）』
かながわ考古学財団 1999a『池子遺跡群Ⅷ　№ 3・4・11 地点』
かながわ考古学財団 1999b『池子遺跡群Ⅹ　№ 1-A 地点』
かながわ考古学財団 1999c『池子遺跡群Ⅺ　№ 1-A 東地点・№ 1-A 南地点』
金関丈夫 1975「卜骨談義」『発掘から推理する』朝日新聞社
河合章行ほか 2010『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 5　骨角器（1）』鳥取県埋蔵文化財センター
河合章行ほか 2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 7　骨角器（2）』鳥取県埋蔵文化財センター
神澤勇一 1976「弥生時代・古墳時代および奈良時代の卜骨・卜甲について」『駿台史学』38
神澤勇一 1983「日本における骨卜、甲卜に関する二三の考察　―先史古代の卜骨・卜甲と近世以降の諸例との比較検討を中心に―」『神奈川県立博物館研究報告』11
神澤勇一 1987「日本の卜骨」『考古学ジャーナル』281
神澤勇一 1990「呪術の世界　骨卜のまつり―」『考古学ゼミナール 4　弥生人とまつり』六興出版社
北浦弘人 2002「鳥取県青谷上寺地遺跡出土の卜骨」『考古学ジャーナル』492
北浦弘人 2008「青谷上寺地遺跡出土卜骨の属性類型の再検討について」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』2
金建沫 2002「韓半島の卜骨」『考古学ジャーナル』492
木村幾多郎 1979「長崎県壱岐島出土の卜骨」『考古学雑誌』64-4
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996『新保田中村前遺跡Ⅳ　第 6・7 次の調査』
更埴市遺跡調査会 1989『生仁遺跡Ⅲ』更埴市教育委員会
神戸市教育委員会 2003『新方遺跡野手西方地区発掘調査報告書 1』
古浦遺跡調査研究会 2005『古浦遺跡』鹿島町教育委員会
榊原松司・石川和明 1975「静岡県菊川町白岩遺跡出土の枠」『考古学雑誌』61-2
佐賀県教育委員会 2008『牟田寄遺跡Ⅵ　－ 15・16・17 区の調査－』
笹生衛 2006「考古資料から見た古代の亀卜・卜甲と卜部」 東アジア怪異学会編『亀卜　―歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす―』臨川書店
静岡県教育委員会 1975『伊豆柏谷横穴』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991『長崎遺跡（遺物・考察編）』

静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『中島西原田遺跡・八反畑前田遺跡・梅名大曲目遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『瀬名川遺跡Ⅱ』
関和彦 1994『日本古代社会生活史の研究』校倉書房
大東市教育委員会 2003『寺川遺跡発掘調査報告書』
田中弘道･小山浩和･茶谷満 2006「江門洞低湿地遺跡出土遺物調査報告　～青谷上寺地遺跡における環日本海交流の実像を求めて～」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』1
田邊由美子 2003「勝浦市こうもり穴洞穴出土の卜骨」『千葉県立中央博物館研究報告　人文科学』8-1
田原本町教育委員会 1986a『田原本町埋蔵文化財調査概要 3　―昭和 59 年度唐古・鍵遺跡第 20 次発掘調査概報　黒田大塚古墳第 2 次発掘調査概報―』
田原本町教育委員会 1986b『田原本町埋蔵文化財調査概要 4　―昭和 60 年度唐古・鍵遺跡第 22・24・25 次発掘調査概報―』
田原本町教育委員会 1988『田原本町埋蔵文化財調査概要 6　―唐古・鍵遺跡第 21・23 次発掘調査概報―』
田原本町教育委員会 1989『田原本町埋蔵文化財調査概要 11　―昭和 62・63 年度唐古・鍵遺跡第 32・33 次発掘調査概報―』
田原本町教育委員会 2009『唐古・鍵遺跡Ⅰ　―範囲確認調査―』
千葉県教育振興財団 2007『千原台ニュータウン　千葉市草刈遺跡（K 区）』
千葉県都市部 1974『市原市菊間遺跡』
千葉県文化財センター 1979『千葉市城の腰遺跡』
千葉県立安房博物館 2004『房総漁村の原風景　古代房総の漁撈民とその生活』
千葉大学文学部考古学研究室 2001『千葉県勝浦市　本寿寺洞穴・長兵衛岩陰　第 2 次発掘調査概報』
千葉大学文学部考古学研究室 2002『千葉県勝浦市　千葉県こうもり穴洞穴　第 1 次発掘調査概報』
千葉大学文学部考古学研究室 2003『千葉県勝浦市　千葉県こうもり穴洞穴　第 1 次発掘調査概報』
沈奉謹（訳：西谷正）1987「金海・鳳凰洞出土の卜骨の新例」『東アジアの考古と歴史　上　岡崎敬先生退官記念論集』同朋舎出版
東京大学文学部考古学研究室 1979『向ケ岡貝塚　―東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告―』東京大学文学部
鳥取県教育文化財団 2000『青谷上寺地遺跡 2』
鳥取県教育文化財団 2001『青谷上寺地遺跡 3』
鳥取県教育文化財団 2002『青谷上寺地遺跡 4』
長崎県教育委員会 2005『原の辻遺跡　総集編Ⅰ』
長野県考古学会 1969『生仁』
長野市教育委員会 1980『四ツ屋遺跡（第 1 ～ 3 次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群（第 3 次）』
長野市教育委員会 1994『石川条里遺跡　―宮之前地点―』長野市埋蔵文化財センター
中村勉 1996「三浦半島の弥生時代の卜骨について」『横須賀考古学会会報』31
中村勉 2002「三浦半島における卜骨・卜甲研究の現状」『考古学ジャーナル』492
波形早季子 2009「弥生時代の卜骨の再検討　―シカ・イノシシからみた時代性と地域性について―」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』1
波形早季子 2010「弥生時代の卜骨にみられる技術　製作技法と卜骨方法を中心に―」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』2
奈良県立橿原考古学研究所 2000『坪井・大福遺跡』
新潟県教育委員会 1953『千種』
新田栄治 1977「日本出土卜骨への視角」『古代文化』29-12
花島理典・田井知二・西野雅人 1995 「市原市草刈遺跡出土の卜骨」『研究連絡誌』43　千葉県文化財センター
伴信友 1844『正卜考』（国書刊行会 1910『伴信友全集』2 に収録）
平林章仁 2012『鹿と鳥の文化史　古代日本の儀礼と呪術 < 改装版 >』白水社
藤野岩友 1960「亀卜について」『國學院大學日本文化研究所紀要』6
藤野岩友 1978「占卜に関する二、三の問題　―わが国を中心として―」『日本祭祀研究集成　1　祭りの起源と展開』名著出版
文化庁文化財保護部 1984『鹿占習俗』
南知多町教育委員会 1989『神明社貝塚』
宮城県教育委員会 1994『山王遺跡Ⅰ　古墳時代中期遺物包含層編』
宮崎泰史 1999「まつりの品々」『渡来人登場　―弥生文化を開いた人々―』大阪府立弥生文化博物館
望月菫弘 1968「清水市石川遺跡発掘調査概報」『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県文化財保

存協会
本浦遺跡群調査委員会 1990『三重県鳥羽市　白浜遺跡発掘調査報告』
横須賀市教育委員会 1986『鉞切遺跡の調査　C・D 地点の調査』
横須賀市考古学会 1983『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』
横須賀市考古学会 1997『三浦市大浦山洞穴』三浦市教育委員会
横浜市ふるさと歴史財団 2004『杉田東漸寺貝塚発掘調査報告』
立教大学考古学研究会 1969「浜端洞穴」『佐渡浜端・夫婦岩洞穴遺跡』
渡辺誠 1995「全羅南道郡谷里貝塚出土の卜骨」『日韓交流の民族考古学』名古屋大学出版会（初出は 1991）
渡辺誠 2002「卜骨・卜甲でなにが占われたのか」『考古学ジャーナル』492